

科学研究費成果報告書「日本近代史料情報機関設立の総括的かつ細目に関する研究」(基盤研究 (B) (1)、平成 13・14 年度、代表者伊藤隆、課題番号: 13490012)

16. 永島 広紀氏

ながしま・ひろき 佐賀大学文化教育学部日本・アジア文化講座専任講師

日時 : 2002年11月27日

出席者 : 伊藤隆 季武嘉也 有馬学 高山京子 伊藤光一 戸高一成 土田宏成
黒澤良 駄場裕司 赤川博昭 東中野多聞 服部龍二 大久保文彦
佐藤健太郎 近藤秀行 吉良芳恵 武田知己 高橋初恵

伊藤 それでは始めたいと思います。きょうは、佐賀大学の永島先生です。有馬君からご紹介ください。

有馬 それではご紹介します。永島さんは筑波大学を卒業されて、大学院が九州大学文学部で朝鮮史学を専攻されています。現在、佐賀大学ですが、その前に釜山は何年いたんですか。

永島 釜山は2年です。

有馬 外務省の専門調査員として、釜山の領事館に2年間滞在されたご経験があります。それで、戦後のこともご存じだと思いますが、研究されていることは大韓帝国期から、主として昭和戦前期にかけての朝鮮における……どう言えばいいんですかね。小社会集団に関する研究ですかね。

永島 そうですね。

有馬 古い時期ですと、東学系の集団とか、一進会系の教育運動ということから、戦時期の親日派知識人の動向というようなことに至るまで、幅広く研究されているという方です。史料についても、ご自分で実際に歩かれたご経験から、たくさんの知識をお持ちですので、きょうは、そういうことについて、是非伺いたいということをお願いしました。

伊藤 では、どうぞよろしくお願いいたします。

永島 ただいま、有馬先生のほうからご紹介を与かりました佐賀大学の永島と申します。いま、有馬先生からもおっしゃっていただきましたとおり、私はもともと筑波の東洋史を出ました。もともと福岡の人間ということでもありまして、いまは東大にできましたが、自分の田舎にたまたま朝鮮史という、当時、独立講座としては唯一の朝鮮史の講座がありましたので、そこの大学院に入れていただきました。その後、私の指導教官は古代史の先生でいらっしゃいますので、自然にといいますか、必然的にと申しましょうか。有馬先生のところにいろいろ押しかけ弟子としてやっているうちに、どっちかという、あまり東洋史とか、朝鮮史っぽくなくなっているというのが私の研究の現状です。むしろ私が別に網羅的に知っているということでは当然ございませんし、なんなりと、こういうものもあるという史料情報がございましたら、是非ともご教示願いたいというぐらいの気持ち

できょうは参っておりますので、何卒よろしくお願ひいたします。

早速内容のほうに入ります。繰り返しになりますが、私は佐賀大学に98年の秋にお世話になるようになりましたが、それ以前2年ほど、釜山の領事館で外務省の専門調査員をやっておりました。その時、まとまって韓国のなかをいろんなところをうろうろしているというところから、こういうことにもつながってはきているわけです。恐らく釜山とか、韓国の地方の史料の状況に関しては、若干知っている部分もあるかなということでありませう。お配りしているレジュメの内容を簡単に説明させていただきますと、5枚ありますけれども、3枚目までが一応私のしゃべる内容でありまして、4枚目はあとで出てまいります韓国の政府記録保存所にあります総督府文書のマイクロから焼き付けたもののコピーであります。最後は、比較的最近、私が出しました文章がありましたので、なんらかのご参考になればいいと思って、付録として付けております。

レジュメの最初のほうに戻りますけれども、まず、表題に掲げておりますように、朝鮮史といっても、そのなかでも日朝関係史、日韓関係史ということに関して、割と絞ってお話ししたいと思います。とりわけ、私が最近集中的にやっております日本統治期といひませうか、植民地期の朝鮮ということを中心をやってみたいと思ひます。まず、「①」としましてここに掲げさせていただいておりますのが、韓国内の所蔵状況ということで、あとあと中国であるとか、これはほとんど小さいものですが、あるいは日本と、①②③と分けさせていただいております、まずは最初に韓国のことからです。以前のこちらの研究会の報告書も読ませていただいたり、あるいはインターネットでその前から読んではいましたが、韓国関係の史料に関しては、若干言及される先生方もおられたみたいですが、まとまったお話があったというわけではなさそうでしたので、多少重複するところはあるかとは思ひますけれども、こういう感じで作ってまいりました。まず、韓国内におきましては、簡単に見られるものと見られないものがあつたり、あるいは、整理の仕方も、日本と似ているようで似ていないというところがありますので。勝手に行つて、その場でコピーを取りまくつて、本を傷めつけてしまうということがよくあるわけですが、逆にガードが堅いものは頑なに見せてくれないというのは中国でも同じです。そんなこんなでありますけれども、学校が持っている図書館の史料ということを考えますと、やはりソウル大学が規模としても量としてもいちばん大きいであろうと。いろいろな図書館がありまして、中央図書館がいちばんでかいわけですが、最近は、これも有名になってきてはおりますけれども、中央図書館の6階に周密書架といひませうか、「旧刊書庫」と呼ばれる場所がありまして。そこはかつての京城帝国大学図書館と法文学部経済研究所が持っていたいろんな本でありますとか、統計類、新聞スクラップがほとんどですが、そういうものがまとまって備置されている場所があります。それと、さらに戦後に、だいたい京城帝国大学の法文学部を卒業した先生が多いんですが、ソウル大学の名誉教授がここ10年20年の間に寄贈された図書の中にも、ずいぶん日本時代といひませうか、戦前のものが含まれております。いまは一応インターネットといひませうか、検索はもちろんできるようになっております。私がかつて96年に留学してソウル大学にちょっといひましたが、その頃はなかに入れてくれましたんでありますが、一応いまは出納を頼むしかないという状況にな

っております。但し、コンピュータに打ち込んであるものは絶対出してくれますので、コピーも取れますし、割とそういう意味では便利になっております。そういうふうな個人文庫がありまして、あるいはどのセクションが製本したのかはわかりかねるところがありますが、割と珍しい新聞がその書庫のなかに入っております。たとえば1908年から併合直前だったと記憶しておりますけれども、仁川で出てました『朝鮮新報』でありますとか、あるいは『京城日報』が1920年以降の分で、それ以前の方はちょっとありませんが、それが昭和17年12月31日までは残っています。そのあとは製本されないまま散逸してしまったみたいで、ソウル大学には、昭和18年以降のものはありません。『釜山日報』が一部分ありまして、あるいは、『朝日新聞』とか、『毎日新聞』もあったかな。メモを忘れてきてしまったので、記憶があれですけども。朝鮮版といわれるものが若干あって、これは日本国内でもあるようですが、あるいは『満洲日日新聞』があるということで、やはり大陸への通り道といいますか。いかにも朝鮮半島ということが如実に現れているかなと思いますが、こういうふうな新聞史料が割とまとまって置いてあります。『京城日報』などは全部マイクロになっておりますので、いまは原紙では見れなくて、マイクロリーダーで見るというふうになっております。『満洲日日新聞』は別のところでも見れるでしょうし、特にマイクロ化はされていないと私は承知しております。あと、そういうふうなものがありまして、それがほぼ京城帝国大学時代からの収集物であると思われます。

その2階ぐらい下の4階部分ですけども、一般の開架書庫もありまして、そこはいわゆる予科でありますとか、あるいは京城高商、日本の国内と一緒に、戦時期のいちばん最後に経済専門学校と名前が変わっておりますけれども、京城高商の書籍などがそのまま入っております。上の「旧刊書庫」に抜けている部分の下で補えるということが割とありました。あるいは、京城帝国大学の『学報』などがなぜかこちらの一般書庫のほうにそのへんにほうってあるという感じで本当に置いてあります。それは開学の時から、昭和20年の1月ぐらいまでが残っております、それは大学本部にもないという話ですので、そんなところに置いておいてはだめだろうと向こうの人には言いますが、いまだにあるみたいです。ということで、そういうふうな図書館の史料、あるいはかつての法学研究室的蔵書を継承したと思われる法学部のなかの法学図書館がありまして、これもほかのところで見ようと思えば見られますが、高等法院の判例集がまとまって、1930年代から1940年代にかけては、揃って入っているということがありました。あるいは農科大学は、ソウルよりもちょっと南に50キロぐらい行ったところに水原（スウォン）という町がありますけれども、そこにかつての水原の農林専門学校時代の蔵書を受け継いだ農学図書館というのもありまして、やはり雑誌史料などで、ソウルの本校といいますか、中央図書館で抜けているものがこちらで探せるということがあります。

あと、5番目の「奎章閣」はご存じの先生方も多いとは思いますが、もともとは王朝時代の文書庫でありまして、近代とは直接関係のないものが多いんですけども、それにしましても、開化期以降といいますか、実録でありますとか、『日省録』『備辺司謄録』とか、そういうふうな旧王朝時代の政治編纂史料に加えまして、甲午改革以降の大韓帝国時期にかけての官庁の往復文書などが割と豊富に残っております。特に、レジュメの中で『李朝

実録』の後ろに括弧しております「鼎足山本」。李朝の場合は史庫が4つぐらいありまして、焼けてしまった場合に復元するためにそういうふうに分けていたわけです。図書館から離れたところにある「奎章閣」というシェルターみたいなところに降りていきますと、ここも一度だけ入れてもらったことがあります。桐箱が置いてありまして、そのなかに、割と大きいのですが、『李朝実録』の原本があります。それは「鼎足山本」と言われるやつですが、「五台山本」というのはもともとは校正刷です。いわゆる植民地時代に、東大に持ってきていたのが関東大震災で燃えてしまいました。その焼け残りが戦前期にさらに東京帝大と京城帝大で折半したと言われるんですけども、その半分ぐらいが戻ってまして、その残りがまだいまだに東大にあります。校正刷で本当に何冊かしか残ってないそうなので、使用価値はそんなにないと思いますが、そういうものがあります。そういうことありまして、中央図書館の「旧刊書庫」の雑誌・新聞というものは、ほぼ昭和17年（1942年）分までがほとんどであります。書籍とか、パンフレットに関しては、数は多くありませんが、どんなに遅くても、昭和20年5月ぐらい以降のものはちょっと見たことがありません。そのぐらいのものが混じっているぐらいでありまして、あまり戦時期の煮詰まった時期のものというのはソウル大学には残っておりません。

ソウル大学に残ってないものを埋めてくれるのがその後ろに書いてあります高麗大学と延世大学の2つの学校でありまして、これは両方とも民族系の旧制専門学校であります。まず、高麗大学の場合におきましては、中央図書館のなかに、旧普成専門学校といたしましたが、その蔵書がやはり入っております。これは日本の漢字にないやつで、コリアンライターで打ったのでそれが文字化けしていますが、金ネン洙（キンネンシュ）と書いて、ネンは禾偏の下に、なんと言うか説明しにくいんですが、年の字の下の部分がくっついたような字があります。その金ネン洙（キム・ヨンス）は湖南財閥といたしまして、『東亜日報』を出しているかつての保守本流グループですが、その寄贈図書が入っていたり、あるいは「玄民文庫」、これは兪鎮午といたしまして、戦前は創作もやっていたんですが、基本的には京城帝大の法文学部の法科の1回生でありまして、秀才の誉れ高い人物でしたが、その後、普成専門学校の教授に日本時代にもすでになっておりました。父親が大韓帝国時代に日本の法律の教科書などを翻訳した学者だったんですが、戦後は憲法の起草委員でありますとか、日韓交渉の韓国側の代表で、第三次会談ぐらいまでの代表をやっていたはずですが、あるいは、そのあと、高麗大学の総長になったり、国会議員になったりということで、20年ぐらい前にお亡くなりになっています。その兪鎮午の文庫が入っておりまして、目録も出ていますが、これはなかなか他のところにも含まれていません。あるいは、レジュメの小さい2番ですけども、亜細亜問題研究所というのが付設されておりまして、その図書館にも、どういうセクションがどういうふうに動いていったかというのがつかみきれないんですけども、所蔵印などを見ますと、普成専門学校の印が押してありますので、やはり専門学校時代からの蔵書が入っています。そのなかでおもしろいのが崔南善コレクションと呼ばれるものでありまして、だいたい古典籍が多いんですけども、日本時代に教育を受けているわけですが、韓国の、民俗学者の走りのような人でありまして、このあと、満州の建国大学の教授になっていく人ですが、その人のコレクションが入

っています。高麗大学の図書館は、昭和20年の6月、7月というのはほとんどないと思いますが、戦時期の最末期までの雑誌がずいぶん豊富に残っております。経済とか、法律関係、特に経済関係の雑誌が極めて豊富なのが1つの特徴であります。

さらに、延世大学の中央図書館のほうは、これは延禧専門学校というのが当時ありまして、それと、これはキリスト教系ですが、セブランス連合医学専門学校がありまして、それが戦後に統合しまして、延禧の「延」とセブランスの「セ」で延世大学です。そこが持っているのも、雑誌史料などが非常におもしろいといえますか、ほかのところではなかなか手に入らないものが多くございます。日韓関係史、日朝関係史的なものでは幾つかありますが、そのなかで私の問題関心とか、あるいはこの研究会の趣旨も考えますと、これがおもしろいかなというのが1つあります。これは日本ではここにあるということはまだ知られていないみたいですが、だぶん抜けが多いみたいですが、『漢城新報』の1895年から1904年までの分が一応マイクロになっておりまして、ご存じのとおり、佐々友房の弟の正之、安達謙蔵とか、国友重章などが発行していました日本語とハンガルの混合文によります日刊新聞を延世大学は持っております。これはまだ僕もきっちり調査していないので、これからやらなければいけないと思っていますけれども、こんなものがあります。

韓国におきましては、ソウル大学、高麗大学、延世大学というのが御三家でありまして、レジュメの2ページのほうにいきますと、そこにずらっと書いてある梨花女子大学であるとか、東国大、成均館大、韓国精神文化研究院（これは別系統ですが）、全南大、慶北大、釜慶大というのはかつての旧制の専門学校を引き継いでいる学校でありまして、こういうところは量はあまり多くなくて、ここに何があるというほどの規模ではないんですが、やはりぼちぼち戦前の史料が残っております。あるいは、「キ」のところですが、韓国精神文化研究院というのは朴正熙政権の頃につくられた、どうも日本の国民精神文化研究所をモデルにしたようですが、1970年代にできました。そこに大学院大学が併設されていますが、その図書館が持っている蔵書は、もともと李王職が持っていた「蔵書閣」という図書室のものでありまして、『李朝実録』が「蔵書閣」にあったんですけれども、「赤裳山本」というのはどうもいま「蔵書閣」にはもうなくて、北朝鮮に持っていかれたという話を聞いたことがありますけれども、ちょっと確認しておりません。『李朝実録』に関しましては、これでだいたいあとで出てくる「太白山本」を含めて、四大史庫というところの本がだいたいあるわけです。さらに「シ」「ス」のところを見ますと、釜山大と西江大学（ソガン大学）というところですが、ここは戦後につくられた大学ですので、戦前の何かを受け継ぐということは一切ないわけですが、釜山大学の場合は、朝鮮戦争の時に避難していったわけですが、何も人間だけが逃げていったわけではありまして、いろんな公文書とか、本も釜山のほうに流れていったみたいです。購入の印などを見ますと、朝鮮戦争の前後ぐらいに買入れたしるしが残っている雑誌史料などがたくさんありまして、意外と。私は釜山に行くことが多いんですが、調べに行くと、ああ、こんなものがあるという発見が毎回あるということで、注目しております。あるいは、これはほとんど分量的にもあれですし、近現代の史料とはちょっと言い難いところがありますが、中村栄孝先生の『日鮮関係史の研究』という、30年ぐらい前に学士院賞をもらった吉川弘

文館から出た本ですが、それを書かれた名古屋大学の先生がかつて朝鮮総督府の教学官、もともとは朝鮮史編修会修史官だったわけですが、その修史事業の際につくられていたご自分の手元に置かれていた『李朝実録』から日韓関係記事を抜粋させたものを自分の原稿用紙に書き写させていたものがなぜか釜山大学の古典籍室にパタッと置いてありまして、これは入手経緯というのはいまいちわからないと図書館の人に聞いても言うんですけども、どうも中村栄孝先生が釜山で引き揚げる直前に泣く泣く置いていったもののなかの1つであろうと言われてはおりますけれども、来歴不明であります。中村栄孝先生が持っておられたということは、恐らく原稿用紙に、「中村栄孝原稿用紙」と刷ってあるものを使ってありますので、間違いのないであろう。あるいは、西江大学にしましても、戦後購入の雑誌ですが、これはなにやら目利きの人が入りたみたいでして、非常に珍しいなかなか残りにくい日本語の雑誌がずいぶん残ってしまっていて、非常に重宝しているところがあります。

以上が学校の図書館系統の残り具合の話ですが、二番は今度は図書館とか文書館の話であります。最大規模のものは、やはり旧朝鮮総督府図書館の蔵書を引き継いでおります国立中央図書館が圧倒的であります。但し、大きな組織でありますために、これはソウル大学でも一緒ですけども、昭和18年以降のものというのが、やはり残りが非常に悪いです。どうしても受け入れ作業中のまま敗戦を迎えてしまったということがあるみたいでして、戦時期の雑誌が特にごっそり抜けています。そのちょっと前の部分は残っておりますので、もしかしたら、その部分を焼いてしまったということはないと思いますが。文書を焼く焼かないという問題はまたいろいろ問題になろうかと思えますけれども、また触れたいと思います。総督府図書館があつて、下のレベルで府立図書館があつたわけですが、京城府立の鍾路図書館、南山図書館、これが旧京城府にありました府立図書館としては、大規模のものであります。むしろこっちのほうが昭和20年前後ぐらいまでのいろんな本が残っているケースがままありますが、分量的にはたいしたことはありません。あるいは、仁川の府立図書館、大田の府立図書館、光州の府立図書館、大邱の府立図書館、釜山、馬山とあるわけですが、仁川にしても、大田にしても、大邱にしましても、釜山にしましても、それぞれ戦後につくられた目録がありますので、おおよその概要はつかめると思えます。特に大邱と釜山に関しましては、若干4ページからの注の1番、2番のあたりに書いております。いちいち読むのはあれですが、こういうふうな目録が出ています。特におもしろいのが、来歴を考えますと当然かもしれませんけれども、釜山の図書館には、釜山府史の編纂の過程でどうも収集したようですが、結局、これは原稿のままで完成しなかったものであります。そのなかで「朝鮮事務書」と呼ばれる、あとで編綴したのかもしれませんが簿冊みたいな感じですけども、そういうふうな開国期直後から、まだ対馬の倭館が草梁公館というふうに変えた直後ぐらいから釜山領事館時代にかけての開国期のいろんな外交文書が残っておりまして、それはどうも外務省の外交史料館にはなさそうなものもありそうですが、1個1個チェックしてないのであれなんですけれども、だいぶ前に韓国で影印本も出ておりますので、割合使っている人は使っている史料ではあります。他にここの「朝鮮事務書」に入っていない文書も若干あります。

あるいは、地方の新聞はおもしろいところがありますが、釜山のいまの市立図書館には、国権党と九州日々新聞のメンバーがさきほど出てきました『漢城新報』をつくるちょっと前まで、まずは釜山で先行的にやっておまして、その時につくっていました『朝鮮時報』という新聞があります。直接ではなくて、経営権委譲とか、細かい話はいろいろありますが、そのグループがつくったものが発展していった『朝鮮時報』と呼ばれる日本語新聞が1914年から1940年分まで残っております。あるいは葛生能久とか上田務（黒潮）とかの黒龍会・玄洋社、あるいは九州日報系といえるのかもしれませんが、そのグループが1905年に創刊しておりました『朝鮮日報』を1907年に引き継いで創刊されます『釜山日報』が1915年から1944年まで残っています。戦時期のものはだいぶ抜かれておまして、あまり残りがよくないんですけれども、いまは一応マイクロで全部みることができます。いま、原紙はかなり傷んでいるので見せてくれなくなりました。そういうことがあつたりしまして、ここらへんは政府寄り、反政府系の新聞があつて、しかも、釜山だと、九州日報系と九州日々の玄洋社と国権党がきちきちやっているとこのをそのまま持ち込んでいるというのがなかなかおもしろいところでもあります。

そういう地方の図書館の次に書いてあります鉄道図書館が規模が大きくてかなり貴重な蔵書を持っていたらしいんですけれども、朝鮮戦争の時に焼けてしましまして、若干図書が焼け残って、群山かなんかの図書館にちらっと残っているという噂だけは聞いたことがあります、ほとんどが焼けてしまったみたいで、ちゃんとした目録もありませんし、何か概要はつかみかねるんですけれども、数万から数十万冊の単位で日本語の図書を持っていたということは確実ですので、どこかから出てくればいいなと思っておりますが、これは不明であります。さらに文書館としての規模として考えると、「エ」のところに取り上げております「政府記録保存所」というのがあります。昔は日本で言うと総務庁みたいなところに所属していたんですが、1996年に向こうもいろいろ省庁の改編をやりまして、その時に行政自治部というのができまして移管されました。これはもともとソウルが本所で、釜山に支所があるという体制でやっておりましたが、3年前か2年前かに大田という忠清南道の町に万博の跡地なんかを利用して庁舎移転をやっているんですけれども、そこに本所が移りました。釜山支所はそのままですけれども、あとはソウルに連絡事務所みたいなソウル支所という名前が残っておまして、いまは3ヶ所の体制でやっております。そこはこの研究会でも触れられる先生はちょこちょこおられたと伺っておりますけれども、やはり朝鮮総督府の公文書を大量に持っておまして、若干の統監府時代の文書も含んでおります。あるいは『李朝実録』を持っているというところが特徴的なことであります。

参考資料の4枚目にお付けしておりますのがさきほども申しましたとおり、向こうの政府記録保存所に残っておりますもののなかから、私の興味というか、専門に近いところだけのものです。レジュメのほうにも書いてありますが、非常にガードがいまだに堅くて、なかなか「これを見せて」「あれを見せて」というふうにはいかなくて、いろいろ面倒な手続きを繰り返して、やっと出てきたというぐらいですが。上のほうに掲げておられますのが、そこに書いてありましたように、隆熙4年ですので、これは1910年であります。統監府のいちばん最末期のものですけれども、警務局長から総務長官へ宛てたものです。当時、

まだ総務長官がおかれていて、のちにこれはいわゆる統監、副統監、その下に総務長官がいたはずですが、それに対する事務取扱の石塚英蔵に送った文書の写しが残っています。こういう警務史料も割とあります。内容はそこに書いてあるとおりに、一進会の話です。あるいは、時期をちょっとずらしまして、だいたい出てくるものでは最末期のほうですが、文字が滲んでいます。昭和16年2月6日付の国民総力本府連盟理事長から各愛国班長へということで、ご存じのとおり、大政翼賛体制といいますか、朝鮮におきましては、国民総力連盟というものがおかれておまして、朝鮮では愛国班という名前がついておまして、日本でいうところの隣組なわけですが、その機関誌の講読に関して、ちゃんと配るよという話です。内容はそんな感じですが、時期的にこの時期までぐらしか残っていないということで、少し象徴的なところがありますので、敢えてコピーして持ってまいりました。こういう感じで、目録上で確認できるのですが、1907年以降で一応昭和18年ですから、43年ぐらいまではあると。目録で確認しているだけで、私も見ているわけではありませんが、19年、20年の史料はほんのちょっとだけ混じっている可能性はあるみたいですが、ほとんどありません。それは燃やしてしまったということもあると思いますし、その話もあとでまた出てくるかとは思いますが、とにかく残っているものはせいぜい昭和16、17年頃ぐらいまでのものでありまして、あとの時期になるとちょっと残りが悪いというのも、いろんな原因はあると思います。

注の3番に補足的に書いてありまして、まず、最初のほうに書いてあるのは、そういうふうな目録は私も見ておまして、目録がこういうふうな感じで刊行されてきたということとを2、3行書いておきます。さらに、本当にここ1、2年の話ですが、同所から『文書解題』を出すようになっておまして、いまのところ、「警務篇」と「外事篇」というのが刊行済でありまして、もう出たのか出てないのかはまだ確認できていないんですけど、恐らく出ると思います。というのは、10年完結予定で刊行中であるとい前書きに書いてありますが、それを見ますと、昭和18年のものがたまにあるかなというぐらいの感じのようです。これらによりまして、所蔵されている文書群の概要をだいたい知ることができるわけでありまして、索引目録にくっついていきます文書番号とフィルム番号によって、文書の索引というものが可能になっております。しかし、1982年以降にもう一度再撮影を行っておりまして、その時に目録記載のフィルム番号と新たにくっつけられた「カット番号」というのが全然一致しない番号を付けております。史料のほうでいきますと、下のほうにナンバリングしてあるのがどうもカット番号なんですけれども、それがあって、それはもう本当に彼らが事務の整理のためだけにつくったようなもので、外部者への閲覧ということはほとんど考えずにやっていますので、非常に不便極まりないものとなっております。それで、そのカット番号とフィルム番号というのが一致しませんので、どうやって文書を探すかといいますと、結局、同所の閲覧課まで出向きまして、そこに置いてある台帳といいますか、台帳といいますが、元の索引目録に手書きで新番号が書き込まれているだけのものですが、これはあくまでも98年当時の話でありますけれども、それで対照したのちに、新しいカット番号で係官にマイクロフィルムの閲覧を請求します。但し、最近出ました『日帝文書解題』のほうには新カット番号も併記されていま

すので、『文書解題』に出てきているものに関しては、探しやすくなっているようであります。

釜山支所は結局朝鮮戦争の時の教訓によりまして、支所とはいいまして、原本は全部こっちのほうに置いておきまして、ソウルとか、大田の本所のほうにはマイクロフィルムだけしか置いてありません。98年、私が釜山におりました当時はまだ当日の出納というのは全然叶わずでありまして、後日、具体的な史料名をメモで渡しておいて、「あとで電話しろ」と言われまして、電話したら、「見られる」というふうに連絡がとれた時にだけ「もう一度来い」と言われまして、その出頭したのは、借り受けたフィルムをその場にマイクロリーダーが置いてあるわけですが、カット番号を確認しながら、文書の閲覧を行うというふうな仕組みになっております。尚、閲覧を希望する場合には、「情報公開請求書」というものを出さなければいけないとなっていて、結局、係官の審査が行われます。隣に座っているんですが、係長、課長の決裁までちゃんともらって、初めて閲覧が許可されるという方式になっておりました。全部を知っているわけではないのですが、目録以外にも、新たに出てきたものがずいぶんあって、地方の役所に残っていたものが全部吸い上げられるようになっているみたいです。「未整理の文書があるようである」と書いてありますけれども、あります。最初に、私が留学していた頃に、九大の留学生のツテを頼りまして、整理部屋に入ったことがあります。その時にも、全羅道のほうだったと思いますが、裁判所の関係の文書が整理中であつたのを実際に見ておりますので、それはまだ目録に当然入っていないと思います。但し、レジメの5ページの頭のほうをいま読んでいますが、最近雄松堂から出た50万円ぐらいのマイクロフィルムのなかに、「旧朝鮮総督府所蔵『朝鮮人・抗日運動調査記録』」という、出所がまだ僕はつかめていないんですけども、目録を見ますと、それも記録保存所に出していましたが目録には載っていない裁判関係といえますか、思想犯の取締り関係の裁判の調書というものがどうも入っているみたいでして、しかも、それが昭和18年までであると書いてありますので、どうも新たに各地方の裁判所から政府記録保存所のほうに移管された文書が流出したのか、ちゃんとした手続きで出したのかはまだわかりませんが、そういうものがありますので、また、いろいろこれからまだまだ整理というか、こっちも把握していかなければいけない余地が多くあります。

ということで、政府記録保存所の話は一旦切りまして、レジメの2ページに戻りますと、今度は国史編纂委員会と書いてあると思います。これはご存じのとおり、朝鮮史編修会の蔵書をそのまま受け継いでおきまして、有名なのは「宗家文書」なわけですが。これは私は見ておりませんが、有馬先生は実際に見せていただいたそうですけれども、日本公使館記録のガラス原版が置いてありまして、これも復刻版というか、国史編纂委員会から刊行物として出ているんですが、「読みにくい」と言っていたら、有馬先生が曰く、「それは元のガラス乾板が曇っていてだめなんだ」ということを教えていただきまして、ああ、なんだというような笑い話なんですけれども、そういうことがありました。あと、国史編纂委員会はそういうメジャーな記録文書のほかにも、その図書室に置いてあつたとおぼしき日本の統治時代のいろんな雑誌で、あまり図書館には残りにくいような雑誌がなぜか製本して片隅にポテッと置いてあるということもありまして、そういう意味でも、近代史と

どうか、植民地時代のことをやっている人間にとっては、まあまあ、使いでのあるところ
であります。

さらに、「カ」というのは、財団法人韓国研究院を挙げておりますが、これはかつてサン
シャインビルの中にあつた韓国研究院とはまったく別のものであるということでありま
す。有名な崔書勉という人と関係があるのかと、ここの図書室長に聞いたところ、「あんな
ものとは関係ない」と怒られました。どう関係があるのかわからないのかということまでは教え
てくれないんですけれども、関係ないということですので、まったく別系統の、どこの財
団がバックになっているかというのは全然教えてくれませんが、どこからかお金が出てい
て。開院50年とかを迎えていますので、ずいぶん古くからやっています。戦後の購入資
料がすべてでありますけれども、そのなかに総督府の内部参考用としか考えられないよう
な『検察要報』みたいなものがあります。これはこの間あることを知って見に行ったん
ですけれども、高等法院の検事局が出して、これは時期的に言って、まず、ここでない
とないだろうなという感じですが、そういう警務局関係のいろんな製本雑誌とか、内部参
考用の資料が流出したことがあったみたいでして、それを運んで何冊か持っております。
あるいは、当時、植民地時代に出ていました朝鮮総督府系の朝鮮語の日刊紙『毎日申（新）
報』を原紙で所蔵していることで有名でもありまして、この新聞に関しては、影印版がず
いぶん前に出ております。非常に読みづらくて大変ですけれども、もう一遍出してくれな
いかなと思っているぐらいです。

あるいは韓国にも国会図書館がありますけれども、そこにも若干戦後に集めたものがあ
ります。ここはもうコピーもさせてくれませんし、閲覧も面倒臭いので、僕もあまり行き
ませんが、若干戦前期の雑誌があることはあります。ということで、これが一応ザッと
韓国での話であります。

「②」に移らせていただきたいと思っておりますけれども、中国に関しては、私はまったく素
人といえますか、私は有馬先生の鞆持ちと言い張っているんですけれども、本当にたまた
ま後ろに付いて行って、誰が呼んだか松原探検隊という九大の先生の調査グループがあり
まして、それに付いて、私も末席を汚させていただきました。それでも遼寧省、黒竜江省、
吉林省の東三省のいろんな大きな所は巡らせていただいています。基本的に私はどうい
うふうに日本語の史料があつて、特に雑誌史料がどうなっているかということを中心に
見させてもらっていますが、やはり有名な遼寧省档案館には満鉄奉天図書館の本が数万冊
ありまして、やはり朝鮮関係のものも必然的に含まれておりまして。これは目録があるの
で、簡単に何があるかということはわかると思います。黒竜江省図書館は本当にこの間有
馬先生と行ってきたばかりですが。注の4番に書いておりましたけれども、9月に行った
時に引っ越しの途中だったので、ほとんど雑誌の出納はできないというか、本当は横に紐
で括っておいてあったんですけれども、それは触ってはだめだと怒られましたので見られ
ませんでした。一応カード目録で雑誌の所蔵状況の確認だけは行うことができたりまし
て、それを見ましたところ、経済関係の定期行物というのは非常に多くございました。
それが黒龍江省図書館のほうでして、また別の図書館があつて、あるいはハルビン市の図
書館とか、また別系統の図書館がありますが、ハルビン市図書館のほうにはほとんど朝鮮

総督府関係のものはありません、いつかこの研究会でも中見立夫先生がお話しになっておられる悪名高き黒龍江省の档案館ですけれども、今回も行ったんですけれども、やはりけんもほろろでありまして、非常にガードが堅うございました。

あとは、吉林省の場合もまだ全然見きれてはいないんですけれども、おもしろかったのが今回延辺の朝鮮族自治州の延吉档案館と延吉大学をいろいろ回ってまいりました。これももちろん有馬先生とご一緒したわけですが、档案館に、特に延吉のほうの、あるいは琿春のほうの割と下のレベルの協和会のいろいろなパンフレットとかがありました。有馬先生がデジカメで撮っておられましたので、個人的にお頼みすれば見られると思いますが、延吉の憲兵隊の紙灰文書がありました。件数はそんなに多くないんですけれども、焼け焦げのものをスクラップ用紙みたいなものに糊付けしまして、それで、一応請求すると、そのまま出てきますので、危なっかしいところもありますが、間にちゃんときちっとした紹介者を立てていたことが幸いしたのかもしれませんが、延吉档案館は非常にフレンドリーといいますか、事務的にてきぱきと出納もしてくれましたし。あまりしてはいけないんですけれども、憲兵隊の資料はさすがにしませんでしたけれども、協和会のパンフレットとかは幾つか有馬先生と手分けしてコピーもやってまいりました。ということで、旧満州地域においては、図書館と図書館との、あるいは官庁と官庁との行き来というのは当然あったわけですので、そうやって交換される雑誌であるとか、新聞であるというものは意外と中国のほうにも残っているというのは自明のことです。これからもできるだけ中国のほうにも目配りしながら。特に私がいま考えておりますのは、大連市図書館が『京城日報』をずいぶんたくさん持っておりますし、あるいは北のほうの清津で出ていた『北鮮日報』をどうも持っているで一応目録上はなっておりますので、そういうものもこれからチェックしていけたらなと思っております。

レジュメが3ページのほうになりますけれども、今度は日本のお話でありまして、これに関しましては、まったく系統立ったものではありませんし、むしろ穴だらけでありますので、いろいろ教えていただきたいところがあるわけです。朝鮮総督府関係のもの、あるいは統治関係のものということに関しますと、やはり日本におきましては、旧制の蔵書ということになりますと、旧帝大の蔵書を引き継いでいる学校、旧官立大学を引き継いでいる、あるいは、目茶滅茶多いというわけではありませんが、件数的にはこれがいちばん多いのが旧高等商業関係のものとなろうかと思えます。特に、言わずもがなでありますけれども、北海道大学、東大、京大、九大というのは戦前から法文学部というか、東大、京大はもちろん文学部があるわけですが、そういうところでありまして、あるいは九大だったら、いまは中央図書館と一緒に入っていますけれども、農業経済関係の朝鮮関係、満州関係の雑誌というものがずいぶん、むしろ東京とかには残っていないものが九大にポツとあつたりすることがありますので、やはり帝大の蔵書はたいしたものだと。もちろん抜けはたくさんありますけれども、規模的に無視できません。さらに、東京高商といいますか、東京商科大学といいますか。一橋は経済関係の雑誌、資料群をたくさん持っております。筑波は、分量は多くありませんが、高等師範ですので、あるいは文理科大時代のものとか、教育関係のもので貴重なものがあります。高等商業関係に関しましては、ひとつ滋

賀大学の経済研究所を抜かしていますけれども、彦根高商ですね。あるいは山口高商、大分高商、長崎高商というものをずっと引き継いでおります山口大、大分大、長崎大、滋賀大の蔵書というのも、最近はちゃんとした目録も出ていますので、何があるかということ把握しやすくなっておりますけれども、件数は多くはありませんが、やはりこういうところに朝鮮関係のものが入り込んでいることがあります。

1行あけて、今度は戦後の収集にかかるところの一群ですけれども、やはりいちばんまとまって持っているのは学習院大学の東洋文化研究所であります。最近やっと、去年ぐらいですが、友邦協会——昔の中央日韓協会とっていたところの蔵書が、ずっと寄託されていたんですけれども、最終的にやっと「友邦文庫」ということで寄贈されたようです。これは有名ですが、かつての朝鮮総督府の東京事務所なんかにあったようなものとか、あるいは総督府関係の人が個人的に持っていたものが寄贈されているということで、ずいぶん貴重なものがありますので、私もよく利用させていただいております。それ以外にも、今度は滋賀県立大学の図書館には「朴文庫」というのがあります。これは強制連行という言葉を作ったことでも知られるんですけれども、朴慶植先生が去年一昨年に交通事故でお亡くなりになられて、そのあと、一橋に昔おられた姜徳相先生がもう定年退職されましたけれども、滋賀県立大学に移られたということが機縁になって、朴慶植氏の個人コレクションが滋賀のほうにっております。在日朝鮮人関係とか、あるいはいろんな取締り関係の珍しいパンフレット、雑誌というものがずいぶん入っております。これも基本的にはまだ目録は出ていないと思いますが、OPACでは検索ができますので、非常に使いやすくなっております。あとは、私が個人的に歩いているところばかりを挙げているだけです。下関市立大の図書館に、農会とか金融組合関係の割とほかのところにはなさそうなパンフレットなんか置いてあります。これは私が手前味噌になってしまいますが、森田芳夫さんという外務省に長くお勤めになっていた人ですが、その森田先生に関しましては、注の5番に割と詳しくライフヒストリー的なものを書かせていただいておりますが、森田さんの蔵書が1992年にお亡くなりになって、横浜の鶴見にお宅があって、奥様はお元気ですが、94年ぐらいにそのお家にお邪魔しまして。私がまだM1かM2ぐらいの頃でしたが、うちの研究室で引き取りに行くと、私としても思い入れがある資料であります。「森田文庫」といって、まだ整理中で全然あれですけれども、やっとカードを取り終えました。ほとんどが書籍であります。若干そこに書いてありますように、「緑旗連盟」という朝鮮で活動していた「立正会」というか、日蓮宗系の社会教化団体ですけれども、その資料が少し入っていたり、あるいは1942年以降ですが、森田さんが国民総力連盟の「国民総力」という雑誌の編輯課長を一時期やっていたので、その関係のものが若干あります。あるいは、森田芳夫さんといったら、いちばん有名な業績が『朝鮮終戦の記録』という分厚い1冊本と資料集3巻の本があるわけですが、それに使われた元の資料というものがファイルして残っています。あるいは、そのあと、法務省に移られますので、在日朝鮮人問題を統計的に扱った最初の人でありますし、さらに外務省に移ったあとでは、最初に日韓の国交正常化交渉を現場で事務をやっていた人として、ノンキャリアとして、ずっと外務省でそういう仕事を担当されておりました。最終的には、韓国ソウルの日本大使

館の参事官で、定年退官されまして。そのあと、国際交流基金の日本語の先生になられて、向こうの大学で長く日本語を教えられまして、その間、九州大学のほうにも、非常勤で来られていまして、そういう機縁がありまして、結局、九大から学位をお取りになったということもありまして、お亡くなりになったあと、ご遺言によりまして、九州大学のほうでいただいたという経緯でございます。

これも言わずもがなですけれども、斎藤実記念館にも、時期は偏ってますけれども、朝鮮関係のものはありますし、あるいは、それと対をなす憲政のほうにあります史料というのも、これは私が言うことでもないんですけれども、逆につまみ食いばかりをさせていたでいるわけですけれども、「小川平吉文書」であるとか、そこに書いてあるもののなかに、いろいろ韓国関係、朝鮮関係のものがありますので、逆に本当にこれは感謝しながら使わせていただいています。統治関係ということになりますと、やはり分量的にいちばん多いのが「大野文書」でありまして、彼が南次郎のもとで政務総監をやっていた時期の、特にそのなかでも、地方の咸鏡北道とかのいろんな当時の文書などが系統立ってではありませんけれども、そういうものがずいぶん残っていますので、ずいぶん貴重なものが含まれています。これは先生方は皆さんご存じだと思います。日本近代史と植民地時代の朝鮮というのはもちろんリンクしているところが多いので、だいたい日本国内でやっていることというのは朝鮮でもやっているわけでありまして、そのなかの1つが大日本連合青年団かなんかの関係のことが朝鮮京城支部という動きがありますので、韓国側にはさすがに残ってないんですけれども。日本青年館のほうの図書室に入れてもらいまして、いろいろ探しましたら、地方青年団の史料とか、朝鮮でいろいろ在留していた日本人たちがやっているような史料というものがやはり残っております。でも、昭和の初期のもの、3、4年とか、せいぜい8年というものが大半であるようです。

矯正協会の図書館に最近行き始めていますが、ここにもそこに書いてありますような行刑とか、司法保護関係の雑誌史料があります。これは韓国にも残ってないようなものが逆に日本に残っているという例です。そもそも私がこういうふうなことに踏み入れたのは、さきほど紹介のなかにもあったんですけれども、一進会の史料を集めているうちに、これも有名な武田範之文書が新潟県にありまして、「洪疇遺績」というやつですが、それが新潟県の顕聖寺とか薬師院とか、あるいはその時の副本が、正確な名前は僕は知りませんが、東大の総合図書館の「鷗外資料」というか、森鷗外文庫のなかにあります。そういうものも非常におもしろいわけですが、逆に朝鮮史的なことから見ると、薬師院ではなくて、顕聖寺のほうに一進会が出していた機関新聞が1年半分ぐらい残っておりまして、それは韓国語のものですが、やはり『漢城新報』のグループがずいぶん挺入れして作らせている新聞のようでして、お互いに記事を引用し合っていますので、できれば『漢城新報』と『国民新報』というものは対照しながらじっくり検討してみたいなといつも思っております。

その下の四方朝鮮文庫というのは、京城帝大の経済学の先生で四方博先生とおっしゃる先生が戦後になけなしのお金を注ぎ込んで買われたもので、いま名古屋のお嬢様が守っていらっしゃいます。本当に自宅の書庫ですが、なかなかどうやって集めたんだろうというような珍しい戦時期にかかりますいろんな雑誌とか本が残っておりまして、目録が出てお

りますので使うことはできます。さらに、神戸市立図書館には、「青丘文庫」というのがございまして、これは在日韓国人の商工人というか、要するに、神戸地震の時に燃えちゃった一帯ですが、長田区とか、あのへんでゴム草履とかを作っていたと聞いていますが、個人的にそういうことをやっていた韓哲曦さんという人が(もうお亡くなりになりましたが)地震の直前に自宅から引き取って、別のところに置いておいたお陰で焼けずに済んだということらしいんですが。お亡くなりになったあと、神戸の市立図書館のほうに移されておりました、目録もあって、一室がちゃんと設けられていまして、非常に使い勝手がよくなっています。戦時期の在日朝鮮人関係のものだと、そこにいくと、複製のものも含めて、だいたい粗方基本的なものは揃うということになっています。

さらに、今度は自分の職場というか、住んでいるところにどんどん近くなってくただけの話ですけども、この研究会のほうでも大物の文書であるということは何回か話題になっているみたいですが、山口県公文書館にある幾つかの朝鮮関係のものとしては、林文書、あるいは湯浅倉平の関係文書というものが非常に有名です。ただ、この林文書に関しては、その後はどうなったかはわかりませんが、報告書を見せていただいている限りでは、ずいぶん大物の文書であるというふうなことで話題になっていたみたいですけど、別に小物というふうには言いませんけれども。林という人物は注の6番に挙げておりますけれども、山口県出身の警察官からのたたき上げの人でありまして、ただ、非常に優秀だったみたいでして、途中で巡査をやっていたあとに、普通試験に受かって、警部補になって、さらに朝鮮語奨励試験というのが当時あったわけですけども、朝鮮語も勉強して、朝鮮語もぺらぺらになったみたいで、それから、属になって、警務局の図書課に配属されて、さらに通訳生になって、やっと40近くになって通訳官になったところでやっと高等官七等ということで、おもしろいのは、その時にしばらくハルビン駐在の総督府派遣員ということで、ハルビンに派遣されていまして、その時に集めたものがずいぶん珍しい史料があるみたいです。実際に少し請求して見たこともありますが、林という人はだいたいこういう来歴の人であります。

さらに、これはご当地的なものですが、これも有馬先生のお話のなかにも出てくる話ですが、いまはどうか知りませんが、福岡市総合図書館というのが割と潤沢な資金で買い漁っているところであります。そのなかにおもしろいのが、博多港の引き揚げ関係を市の広報なんかで呼び掛けて一時期集めていたことがありまして、最終的に記念碑を造ってフィナーレということだったんですけども、その時に集まった市民からのなかに、やはり日本人の引き揚げの朝鮮関係のものが結構あります。それが注の7番に挙げておりますけれども、「日本人世話会」、さきほど出てきました森田芳夫さんが絡んでいる仕事でありまして、あるいはおまけでいちばん最後に付けております私の駄文がありますけれども、そのことをちょっと書いておりますので、お時間がある時に見ていただければ幸いに存じます。そういう世話会関係の文書というのが「波多江資料」と呼ばれるものですが、それが非常に貴重でありまして、いまは図書館に行けば、裏から手を回せば原本が見られるかもしれないんですが、基本的にはマイクロフィルムで見るということです。あるいは、世話会会報などは別のグループというか、檜山先生とか、筑波の大濱先生がやっていらっしゃった

平和記念事業特別基金のお金で資料所在調査報告というのが出された時に、『京城日本人世話会々報』というのが遺族から提供されていて、いまはそれが影印復刻されていますので、全部それは見ることができまして、それが福岡総合図書館のほうにも、また別系統で入っているという状態であります。

話がいろいろあちこちに行っていますが、さらにこれはたまたま目についたということだけで、これからの展望ぐらいの話ですか、こういう文書館とか資料館というものはもちろんですけれども、今度はやはり史料調査というものが、近代のほうというのはなかなか目配りができないというか、どうしても文書調査というと、近世になってしまいがちなところがありますが、やはりいろいろちゃんとみていると、たとえば福岡県の古文書調査のなかで出てきた朝鮮の水利組合関係の文書などが出てくることがあるということを考えますと、水利組合に関しては、朝鮮でもまったくないわけではないんですが、そういうふうには実地指導に当たった技官というか、技師たちの個人史料のなかにたまたまそうやって朝鮮関係のもので珍しいものが入っていますので、これからは結局、マイクロで1個1個ローラーで潰していくしかないなど。気が遠くなりそうですけれども、そういうことも踏まえて、結局、資料の把握というものはやっていきたいし、やっていかなければならないなど思っている次第であります。

これはもう史料の話ではなくて、史料とはもちろん関係はありますけれども、宣伝も兼ねまして、私がだいたいどんなことを最近やっているかということをご報告がてらくっつけているわけですが、変なところをいろいろ回っています。一之江にあります国柱会の「師子王文庫」でありますとか、あるいは武蔵野のほうにあります里見日本文化学研究所の日本国体学会。結局、日蓮宗というか、田中智学系統です。里見岸雄は田中智学の実の息子なわけですが、「師子王文庫」はかなりきれいに整理されていますが、「大王文庫」のほうは、お金がないみたいで、非常に埃まみれのままですが、やはり幾つか朝鮮に出ていたものでなかなか残りにくい雑誌が発見できましたので、これからもいろいろアタックしていきたいところです。そういうところに行ったりとか、あるいは、これは写真とかが多少出てきたので成果がありましたが、長崎祐三という、戦時期の末期のほうの朝鮮では割と有名だったみたいですが、もともと検事でありまして、旧制の佐賀高校を出まして、京大の法学部を出て、高等試験の司法科に受かって、という人物ですが。その人物が保護観察所長を長くやっていましたが、その時に、保護観察所で保護観察中の朝鮮人の思想犯を塾をつくって、その塾の日本語の先生にするということで、思想更生をやらせるというちょっとユニークというか、特殊なことをやっておりました。そのご家族が藤沢にいらっしたりとか、名古屋にいらっしたりとか、あるいは福岡の大牟田にいらっしたりということで会いに行って、その時に写真を見せてもらいました。日記とかはなかったんですけども。これは全体的に言えることですが、日本人が持ち帰っているということはないかななくて、どうしてもあとは二次史料というか、新聞とか雑誌とかで固めつつ、そういうふうな遺族への聞き取りとか、関係者への聞き取りというもので補完していくしかないということで、非常に隔靴搔痒なところがあります。最近ちょっと力を入れておりますのは津田栄さんです。お嬢さんがまだ田園調布のほうにご健在ですが、さきほども話題に

しました緑旗連盟というのは、日蓮宗系の立正会というのが京城帝大のなかにつくられてまして、津田栄さんは帝大の予科の化学の先生で、もしかしたら、先生たちのなかにも、学生時代、津田栄さんの「無機化学通論」で勉強された方もいらっしゃるかもしれませんが、化学の教育のほうで有名な先生ですが、そういう緑旗連盟という日蓮宗系の社会改良団体みたいなものをずっとやっております、そのつらみといいますか、弟であるとか、さきほど出てきた森田さんにしたって、結局、緑旗連盟の幹部だったわけですし、この人たちの動きをいま集中的に追っ掛けています。その結果、九大の森田文庫のなかでいろいろ見つけたり、あるいは、アメリカの議会図書館のなかから緑旗関係の雑誌があったということもありました。さらに、緑旗連盟が乳幼児健康相談というのを戦時期にやっていたんですが、栄養学とか、乳幼児の健康問題ということに関しては、ずいぶん先駆的だったみたいですが、そこで高井俊夫という当時の京城帝大医学部の助教授が緑旗の人たちと一緒にになって、そういう運動をやっております、この高井俊夫さんというのは旧制の九大の医学部を出た人で、富山のご出身ですけれども、戦後は久留米大学の医学部を経まして、大阪市立大学で長くダウン症の子供の医療とか、教育をずっとやっております、いまでも息子さんが跡を継がれて、大阪の梅田のほうではずいぶん有名なダウン症の施設があるそうですが、そこをつくられた方の遺族にちょっと会って、いろいろ当時の写真とか、本というものを見せてもらったりしています。

あるいは、「⑥」の坪井さんという方はいま90歳でお元気でしょうちゅう文通をさせていただいていますが、この人がやはり若い頃は津田栄に習っているということで、緑旗連盟に入っていたこともあるんですけれども、そのあとは高等文官試験に受かって、京城帝大の法文学部を出て、高文試験に受かりまして、そのまま朝鮮総督府に就職しましたが、ずっと警務畑を歩かれまして、最終的には忠清北道の警察部長をやっていたところで終戦になった方です。この方への聞き取りによりますと、さきほどの朝鮮総督府の文書の話ですが、やはり戦時の疎開のために、いまはなくなってしまったんですけれども、かつての朝鮮総督府の建物の上のほうにドーム形式の部分がありましたが、あそこに臨時の書庫をつくって、警務関係のやばいものは全部集めたというんです。結局、疎開できないまま8月15日になってしまって、現用記録というか、デスクに置いてあったものとか、部屋に置いてあったというものとか、あるいは上に上げておいたものというのは全部中庭に放り投げちゃって、油をかけて焼いたというのは確かみたいです。だから、どうしても18年19年20年の資料がほとんど残ってないというのはやはり燃えてしまったというのがどうも大きそうです。それは本当に伝聞というか、坪井さんにしても、当時はもう忠清北道のほうに赴任してましたので、そういう話だというふうなことですし、あるいは、文書をアルバイトで整理していた女性がまだ相模原のほうにご健在で、その方の話を聞いても、やはりそうだというお話ですので、燃やしてしまったのは確かみたいです。ですから、燃え残りのやつとかもあつたかもしれませんが、基本的に朝鮮総督府のいろんな現用記録とか、10年保存とか、永年保存とか、そういうところは日本の役所と一緒になんでしょうけれども、そういうもののなかでも、結局、文書庫のなかに入れて、ちゃんと文書として登録されたものに関しては、かなり残りがいいみたいですが、やはり現用記録に近い

ものというもの、戦時期の末期のものというのやはり手元に置いておいたものとか、あるいはそうやって疎開させるために集めておいたものというの、どうしても燃えてしまった可能性が高そうです。

雑駁なお話で申し訳ありませんが、福岡には、やはり地理的なこともありまして、引き揚げ者のなかに東亜連盟関係の人がいまして、もともと福岡で東亜連盟をやっていた人たちと半島でやっていた人と、あとは、東亜連盟の石原莞爾たちの運動とはちょっと違うんですけれど、やはり日蓮宗ということでは一つ友好関係にあった緑旗連盟の人たちが戦後の福岡でいろいろ復興運動をやっている、最終的にはGHQに潰されてしまったそうですが、終戦の直後から、朝鮮から帰ってきた人たちが中心になって、福岡で雑誌を出している、東亜連盟などにも関係している九大の教養部の先生が寄贈された本のなかにその雑誌があったのがこの間やっとわかって、やっと見ることができましたが、そういうものがあります。最近、緑旗連盟とか、緑旗連盟が経営していました清和女塾という高等女学校卒業者を対象とした行儀見習い塾みたいな感じですが、戦時期ですので、そういうことだけじゃなくて、結局、朝鮮人の子どもに日本語を教えたりとか、あるいは京城師範学校の付属国民学校にボランティアで行って、いろんな子どもたちの世話をしたりということまでやっていたみたいです。そういうふうな緑旗連盟の人脈とか、国民からつくっていく国民総力連盟の関係者の人たちというのが、福岡だけじゃないんですけども、まだ何人かご存命でして、必死にいま聞き取りをやっている途中であります。

これはまた別件で追っ掛けていますが、竹葉秀雄という金鷄学院の一期生で愛媛の三間町出身の人が戦時期の朝鮮でこういうふうな金鷄学院的なことを事業としてやっております、その竹葉のもとに集まっていくのが朝鮮の思想転向者だったということがあって、当時の割と革新的な知識人たちの溜まり場になっていたようであります、こういうふうな史料が多くはないんですが、写真資料とか、いろいろ聞き取りとか、そういうのを少しずつやっているところであります。あとはレジユメのほうには出しておりませんが、いまの職場が旧制の佐賀高校であります、佐賀高校はほかのところに比べまして、朝鮮人学生が多かったようであります、その追跡調査みたいなこともぼちぼち始めていまして、いろいろやろうやろうとしているだけで、首が回っていないんです。以上ですけれども、だいたいこういう感じで、まだまだ発展途上の人間であります、何卒、お気づきの点とか、これはこうなんじゃないかということがございましたら、いろいろご教示賜わりたいと思います。以上をもちまして、終わらせていただきたいと思います。

伊藤 どうもありがとうございます。どなたでもご自由に。去年だったか、一昨年だったか、延吉かなんかの人の史料は大阪……。

永島 経法大。

伊藤 経法大の。古本屋から買ったのかな。あれは復刻しましたよね。あれも朝鮮族に対する対応だと思いますが。

永島 そうですね。延吉も含めまして、関東一帯の警務記録がずいぶん混じっているようでして、私もまだきちっとは見えていないんですけども。

伊藤 あれも非常におもしろいんじゃないかと思ったんですけども。

永島 話のついででちょっと恐縮ですが、言い損ねましたが、いま、伊藤先生がおっしゃられました大阪経法大学で関東関係のものが出てきたり、あるいは、ご存じかと思いますが、なぜ明治大学が持っているかどうかはよくわかりませんが、関東庁の史料が大量に出てきて、それがマイクロ化されて、そのなかに治安関係のなかに、朝鮮人の独立運動のものがずいぶん含まれているようでして、これもまだ残念ながら、見てないんですけれども、早くどこかで買ってもらえないかなという気がしているところであります。

伊藤 あと、いま、編纂中ですが、児玉秀雄の関係文書を翻刻する作業をいま進めておりまして、季武君と私が中心になってやっていますが、これは朝鮮関係は非常に豊富です。

永島 やはり政務総監時代の。

伊藤 そうです。その時代もありますし。

永島 若い頃はまた朝鮮に行っていますね。

伊藤 そうです。ですから、その関係もありますし、それから、朝鮮における阿部充家とか、それに類する人が何人かいましたけれども、非常に長文の報告の手紙を大変な数送ってきていて、それも全部起こすことにしていますので、ご利用いただけるのではないかと思います。1、2年のうちには本にできると思います。大野緑一郎文書は、私はもらいに行っただすけれども、もうちょっとあったんじゃないかという気がしますので、もう一遍さらってもいいなとは思っています。実は、どうしてもこれはくれなかったんですが、日記があります。これはお嬢さんの中原さんが持っていらっしゃるんです。少し読ませてもらいましたけれども、かなり詳しい日記でした。真崎文書のなかに何かありましたか。

永島 ちょっとだけですが、なんだったかな。特に真崎個人に関係するというわけではなくて、たまたま手元にあったというような感じだと思います。具体的にすぐはなんだったかというのは出てきませんが。

伊藤 あの人はいろいろな人からの意見書とか、パンフレットとかを丹念に取ってあった人なので、これももらいに行った時にずいぶんいいものだなと思いましたが、その後ちょっとフォローしていないので。

吉良 科研費を申請したんですが、現在日本女子大学で宇都宮太郎関係の史料を宇都宮家からお預かりし、整理を進めております。

伊藤 僕がアプローチしたのにな。全然……。

吉良 それで、日記はかなり詳細ですね。書簡とか。

永島 朝鮮では、宇都宮さんは憲兵の司令官をやっていたんですか。

吉良 三・一運動の時の朝鮮軍司令官です。

永島 ああ、朝鮮軍の司令官。すみません。

吉良 やっぱり先生はアプローチなさっていたんですか（笑）。

伊藤 残念だな（笑）。

吉良 中国革命や孫文のことを研究なさっている久保田文次先生たちが、宇都宮徳馬先生にお願いをしていたようです。

永島 教えていただける範囲でいいんですけれども、どういう内容ですか。日記とか、手紙とか、あるいはパンフレット類とか、そういうものでしょうか。

吉良 はい。詳細な日記や書類、大量の書簡が残されていました。膨大な史料群です。中国革命史の先生たちの熱意のおかげで貴重な史料が出ました。

伊藤 それでは期待しましょう（笑）。

永島 ちょっとうっかりしていたんですけれども、結局、ものはないから何も言いようはないんですけれども。朝鮮軍の史料がまったくないというわけじゃないんですけれども、朝鮮側には当然残っていませんし、たぶん朝鮮軍は総督府とはまったく別系統の文章の体系を持ってましたでしょうから、日本の軍隊と一緒にですから、燃してたぶんないと思いますので、結局、防研なんかには少し残っているもので、不二（出版）かなんかで少し資料集が出ましたけれども、肝心なものがほとんどないようでして、それは何か。

伊藤 立花小一郎というのは朝鮮軍司令官じゃなかったっけ。

吉良 立花小一郎は、大正3年から朝鮮駐劄憲兵司令官をやっていますね。

伊藤 確か立花はそうだと思います。

土田 はい。やっています。

伊藤 立花も史料をもらいに行ったんだよ（笑）。それで、日記もあったような気がするんです。

永島 あります。

吉良 それはいまどうなっていますか。

伊藤 いや、国会図書館。

伊藤 所沢に遺族がいてもらいに行ったんです（笑）。立花小一郎の息子さんのところに行ったら、確か夏目漱石からの手紙が何通かあって、これをもらっては悪いと思って、それだけ置いてきました。

永島 軍隊と軍事関係は個人文書からアプローチしていかなければいけないですね。

伊藤 たぶんそうでしょうね。防研になれば、そうですね。

季武 ついでに言うと、これは僕も知らなかったけれども、寺内正毅も国会図書館だけじゃなくて、ご存じだと思いますけど、山口にもありますね。自衛隊のほうの山口の駐屯地にもある。そういうのは聞きました？

永島 正毅のほうですか。寿一のほうですか。

季武 正毅。

伊藤 僕は全然この緑旗連盟を知らなかったんですけど、どういう系統ですか。

永島 基本的には、もともと津田栄という人物は三重の出身ですが、一高から東大の理学部という学歴の持ち主で、その時に姉崎正治などの影響のもとで、結局、日蓮宗のサークルに入っていました、そのなかから、田中智学の国柱会のほうに傾倒して行って、自分が京城帝大に就職した時に、東大のなかにあったジコウ会というサークルを自分もつくりたいということで、「立正会」をつくりました。本当に仏教サークルみたいなものから発展して、一種の社会教化というか、女塾を経営しましたりとか、雑誌をずっと発行したりとか、あるいは、いろいろ手広くやっているんですけれども、農民道場を経営したりとか、そういうことを民間でずっとやっています、そのなかから巣立っていった人物が国民総力連盟のほうにスカウトされているというような団体であります。

伊藤 これは国柱会に関係あるわけですか。

永島 そうですね。もともとは京城における国柱会系統のいろんな青年組織みたいなものを糾合したところもあります。

伊藤 朝鮮人の人たちも入っていますか。

永島 途中からです。最初は日本人だけですけれども、戦時期になると、インテリというか、朝鮮人の知識人のなかでは、逆に日蓮宗ということよりは緑旗連盟の会員になっていくというのがずいぶんあります。本当かどうかはわかりませんが、最盛期には地方の会員まで入れると、日本人2000人、朝鮮人3000人ぐらいの規模にまでなったという記録が残っています。

伊藤 そういうところに加盟していた朝鮮の人たちはどうなったんでしょうね。

永島 やはり日本に逃げてきたり、あるいはそのまま頼かむりしているとか、アメリカに逃げちゃったりとか、あまりいれなかったみたいです。あるいは北に行った人もいたみたいですが、消息がつかめないとか、あまりいい目にはあつてないみたいです。なかには、京城帝大を卒業した中心的な人物の玄永燮という朝鮮人は直後に命の危険を感じたらしくて日本に密航してきて、結局、沖縄の米軍基地で、北朝鮮の情報を集める仕事をしていたけれども、それも嫌気がさして、最後は大宮で英語塾をやっていました。ここ10年ぐらい前までは生きていたみたいですが、最後はちょっとわかりません。

有馬 詳しく知りませんが、韓国で、割と最近、戦時期も含めて、そういう活動に関する資料とか、機関誌とかの復刻があるような気がします。

永島 そうですね。逆に、私たちも含めた60年代以降の世代で、割と反体制的な人たち、いわゆる学生運動とかをやっていた人たちで研究者になっていく人もいるわけですが、そういう人たちが歴史問題研究所みたいなものをつくって日本に来て史料を集めていたりしています。そのなかで、いま先生がおっしゃったみたいに、国民総力連盟の機関雑誌とか、あるいはなぜかはわかりませんが、緑旗連盟が出していた「緑旗」という雑誌がありますが、それが部分的に韓国で影印復刻されたりとか、非常に製本も甘いのですが、逆にあんちょこというか、韓国まで行かなくても見られるようになってきているというのは非常にあり難いところでもあります。逆に、日本では、朝鮮関係のもの復刻というのは、まったくないわけではありませんけれども、どうしても売れないというのがありますので、満州関係のものに比べると、明らかに件数が少ないです。ずいぶん復刻史料が出てきていますので、史料収集に関しましては、ずいぶん楽にはなっております。

伊藤 さっき崔書勉さんの名前が出てきましたけれども、あの人は自分で何か史料を集めているんですか。

永島 かなり持っていたみたいですが、一部はサンシャインを閉めた時に鶴本（書店）などが買って、ずいぶん流れたんですけれども。

伊藤 売ったんですか。

永島 いらぬものというか、一部です。私も韓国研究院のラベルが貼ってあるままのものを何冊か持っているんですけれども、市中に流れていて、貴重なのは韓国に持って帰っちゃったそうです。骨董まで含めて、ずいぶん価値のあるものを持っているという噂だけ

は昔からあります。

伊藤 アプローチしたことはありますか？

永島 いや、ないです。

伊藤 僕は情熱的でおもしろい人だとは思うんですけども。

永島 好事家という失礼ですけども、骨董の目利きとか、いろんな古い古典籍を集めたりする目利きがずいぶんできたというお話は聞いていますし、ずいぶん文人的な人だったというふうには。

伊藤 文人的な人なんですよ。確か僕は彼のうちにも行ったんだと思いますが、時々東京にいますよね。

永島 ああいう方は日本のほうが楽だと思います。

伊藤 まあ、そうだと思います。さっきのお話のなかで、高商の話が出ましたけれども、神戸の話は出ませんでしたけれども。

永島 落としているだけですけども、あまり。

伊藤 神戸大学は持ってないですか。

永島 持ってないかどうかというのはちょっと把握できてないだけで、恐らくあると思います。ただ、目録をまだちゃんと出してくれていないので、全体像を全然把握できてないだけですけども。

伊藤 神戸大学は非常に持っているんじゃないかなと思いますが。

永島 規模からしても、伝統からしてもですね。

吉良 岡山大学附属図書館資源生物科学研究所分館に、「大原農研」が収集した史料があります。

伊藤 大原農研？

吉良 倉敷にあります。大原社研は社会問題関係ですが、「大原農研」（大原農業研究所）は農業関係の調査書とか、雑誌など、貴重な文献を集めていますね。

永島 岡山大学ですか。

吉良 ええ、大正10年に設置された財団法人大原奨農会農業研究所の図書館が母体となったようです。一度調査に行ったことがあります。

永島 それはいいことを聞きました。

伊藤 朝鮮の商工会議所の雑誌はどこかに揃ってありますか。

永島 いちばん揃っているのは、高麗大学が持っていると思います。

伊藤 東京の商工会議所はどうですか。商工会議所の図書館は各地のものを確か持っていると思います。

永島 そういうことを思ってもみませんでした。要するに、京城商工会議所から出ていた調査月報とかがあるということはありますけれども、直接史料として引用することはあまりないので、名前とどこにあるかぐらいしか、あまり気にはしてなかったんですけども、逆に、東京のほうに。

伊藤 きょうのお話のなかで、日本のなかに都立公文書館が出てきませんでしたけど、どういう意味ですか。

永島 自分がきちっとまだ使い切れていないというのがありますが、いちばん最近復刻されたもので有名なのは、帝国議会の説明資料がずいぶん出てきているということで、京大の人文研におられる水野先生あたりが一所懸命やられています、それ以外に、私はそれこそ検索の機械で見ただけですけれども、当然、朝鮮関係の人事関係のものとかがずいぶんありそうですけれども、直接いまのところは。そう言われてみるとそうでした。

伊藤 児玉さんの史料を見ているとそういう感じがするんですが、朝鮮総督と政務総監は交互にソウルと東京の間を移動しているわけですよ。その時お互いに報告しあっている。だから、総督府関係者の関係文書を追っ掛けるとするのは、いちばん状況がわかるのではないかという気がします。

永島 これも言わずもがなのことですが、結局、最終的に向こうにいた人が引き揚げてきた場合においては、持って帰ってきているということはありませんし、逆にかつて朝鮮に勤務した人のなかで、終戦時に日本にいてという人をアプローチしていくことをどんどんやっていかなければいけないと思います。まさに大野文書なんていうのは、そうやって出てきたと思います。政務総監クラスで何かあるということになると、大野か、逆に、そのあとに横浜市長をする……なんだっけ。

吉良 有吉忠一。

伊藤 有吉はないんだっけね。

吉良 朝鮮関係の史料はほとんどなかったですね。

永島 やはりないんですか。

吉良 但し、先生がいまおっしゃったことに関係するのですが、大正11年に政務総監に就任した有吉は、1年の大半を東京で過ごし、総督府の予算問題や朝鮮銀行問題で政府との折衝にあけておられます。このことは、斎藤実関係文書中の書簡からわかります。又、政務総監時代の回顧録のようなものがあります。

伊藤 それは本ですか。

吉良 草稿のようなものですね。地方県知事時代のものもあります。

伊藤 オーラルの記録ですか。

吉良 どうもそんな気配ですね。いずれ冊子にしようと思っていたのかもしれませんが。

伊藤 それは開港資料館にあるんですか。

吉良 お預かりしています。

永島 政務総監といいますと、あとはさきほど先生に教えていただいた児玉と。寺内寿一のものがあるというのはあまり聞いたことがありませんし、そのへんはあるかないかからちゃんと把握しなければいけないと常々思っていますが、なかなか手が回らなくてというのが情ない現状です。

伊藤 いや、1人でやっていたら、そう手が回らないということは間違いありません。

永島 最近、学習院に寄贈された記録のなかに、2、3年前に朝日新聞にも大きく出たことがありますけれども、録音記録ですね。いま、ずっと翻刻しておりますので、あれをやっているグループと一緒に何かやれないかなと常々思っていますが。

伊藤 あれはすごい記録みたいですね。

永島 かなりいいものですね。

吉良 早く出して欲しいですね。

伊藤 なかなか出せないんじゃないですか。

永島 オープンリールであったということもあったみたいですし、例の昭和史研究所の中村先生がお金を出されてCD-ROMにしてくださって、いま、それから逆にMDに落としているようです。

伊藤 音声記録というのは字にしないと、パラパラと見るわけにいかんから、ずっと聞いてなければならぬ (笑)。

永島 それをやっていた1人がそれこそ滋賀県立大学に就職してしまいましたので、これからどういうペースでやっていくのかはちょっとまだ聞いていないんですけども。

伊藤 ほかにご質問はございませんか。東中野君、何か言いますか。

東中野 ありません。

伊藤 それでは終わりにしたいと思います。本日は、永島さん、大変貴重なお話をありがとうございました。

(終わり)